



 Data	2022-119
監督:	マルジャン・サトラピ
脚本:	ジャック・ゾーン
出演:	ロザムンド・パイク/サム・ライリー/アナイリン・バーナード/アニヤ・テイラー=ジョイ

👁️👁️ みどころ

日本では断然、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の「伝記モノ」が面白い。『三国志』に見る劉備・関羽・張飛の3人そして曹操・孫権ら、英雄豪傑の「伝記モノ」も面白い。しかし、科学者の「伝記モノ」は？

私が中高時代に苦手だった物理と化学でノーベル賞を2度も受賞したキュリー夫人は有名だが、私には縁遠い存在。そう思っていたが、ソルボンヌ大学で女性差別されている姿を見ると？そして、ピエール・キュリーとの共同研究の中で結婚、出産していく、その愛と情熱の姿を見ると・・・？

ラジウムの発見によって実現したレントゲン撮影やがん細胞退治の技術は素晴らしい。しかし、それが軍事利用されると・・・？

核には戦略核と戦術核がある。連日のウクライナ情勢の報道の中、そんな知識も深まりつつあるが、本作はその警鐘となるはず。本作ではそんなメッセージもしっかりと。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■科学者の伝記モノは切り口次第。この監督の切り口は？■□■

「伝記モノ」は切り口次第。それは司馬遼太郎のさまざまな小説を読めばすぐにわかる。その代表は、坂本竜馬を描いた『竜馬が行く』と日露戦争をバックに、秋山好古・真之兄弟と正岡子規の3人を描いた『坂の上の雲』だ。原泰久が書いたコミック『キングダム』の大ヒットによって『三国志』が若者にも読まれているが、『三国志』に登場する劉備・曹操・孫権や関羽・張飛・孔明たちは切り口によっていかようにもなる「伝記モノ」の代表だ。とりわけ、それは英雄豪傑について、また戦争モノについてはっきりしている。

それに対して、同じ「伝記モノ」でも科学者のそれは、切り口に多様性のないのが普

通。日本人科学者の「伝記モノ」の代表は野口英世だが、西欧の科学者の「伝記モノ」の代表はアインシュタインやエジソン。女性に限れば、何と言ってもキュリー夫人だ。彼女は1903年にノーベル物理学賞を、1911年にノーベル化学賞を受賞しているすごい女性だ。物理と化学は中・高校時代に私が最も苦手にしていた科目だから、はっきり言って、私には彼女の業績のすごさを理解することはできないが、ラジウムとポロニウムという2つの新しい元素を発見したことくらいは知っている。たしかに頭は良かったのだろうが、そんな彼女はきっと研究室に閉じこもった、ド近眼のブス女！私は勝手にそう決めつけていたが、それは偏見・・・？

■□■原題「RADIOACTIVE」。なるほど、なるほど！■□■

核兵器には戦略核と戦術核があり、ウクライナ戦争において、もしロシアが核兵器を使うとすれば、それは戦術核。広島、長崎へ投下された原爆は空中で爆発したから放射能が周囲に飛散したが、直接地上に落下させる核なら放射能の飛散は少ない。連日 TV で報道されているウクライナ情勢についての識者たちの解説を聞いていると、そんな知識もしつかり身についてくる。

本作の原題は「RADIOACTIVE」だが、それはラジウムのこと。本作は、導入部で、ポーランド出身の若き女性研究者マリ・スクウォドフスカ（ロザムンド・バイク）がソルボンヌ大学で女性差別を受け、ろくに研究の機会を与えられない姿とともに、それにトコトン立ち向かう、トコトン気の強い女の姿が描かれる。そんな女に興味を持つ男は普通ないはずだが、「伝記モノ」の主人公になるような女性には、神様も粋な計らいをするらしい。

本作ではそんなマリに興味を示し、共同研究という形で、協力を申し出た科学者ピエール・キュリー（サム・ライリー）の姿が描かれる。この運命的な出会いによって、マリはピエールと結婚し、キュリー夫人になって研究に邁進するわけだが、彼の協力の下にラジウムとポロニウムという新しい元素を発見し、ノーベル賞候補になるというストーリーはわかりやすい。それが、イラン生まれで、14歳の時に亡命したマルジャン・サトラビ監督の演出のなせる技だから、前半ではそれに注目。なるほど、こんな演出をしているから、本作の原題は「RADIOACTIVE」。

■□■邦題の副題は？そこに本作の狙いがはっきりと■□■

他方、本作の邦題は、『キュリー夫人 天才科学者の愛と情熱』という長ったらしい副題がついている。近時、原題はシンプルでエッセンスだけを表現しているのに、邦題は分かりやすいけれども、長ったらしい説明つけるものが多い。私は基本的にそれに反対だが、それはどんな映画かをわかりやすく示し、1人でも多くの観客に見てもらうための営業戦略だから、ある程度仕方がない。しかし、本作については、この邦題はグッド。それは前半でもある程度わかるが、とりわけ本作後半を見ればバッチリだ。

キュリー夫人は生涯独身を貫いたオールドミスではなく、最愛の男性と結婚し、女の子2人を産み、長女は母親と同じ科学者に成長し、母親と同じノーベル賞まで受賞したとい

うからすごい。しかし、ある日ピエールが不慮の事故で死んでしまった後のキュリー夫人の愛と情熱は・・・？

■□■夫婦像は？夫婦仲は？夫婦喧嘩は？■□■

夫唱婦隨は理想的な夫婦像の1つの姿。中国では、夫が死亡すれば「妻は子に従うべし」があるべき姿として教えられてきた。しかし、21世紀の今、それらを真正面から推奨する時代ではない。しかし、マリとピエールが1回目のノーベル賞を受賞した1903年は、フランスといえども、さまざまな女性差別があったのは当然。日本ではちょうど日露戦争が始まる前の年だから、明治時代の男尊女卑の思想が定着していたのは当然だ。そんな時代状況下のピエールとマリが共同研究を続ける中で互いの愛を確認し結婚に至る姿は、互いを対等のパートナーと認めた（むしろマリが上位）上のことだから、当時としては珍しいパターンだ。

しかも、長女イレーヌが生まれる中での共同研究だから、そんな結婚はなおさらすごい。もっとも、ノーベル賞の受賞式への参加をめぐるのは、ピエールがかなりマリに気を遣っていたことがわかるだけに、帰国後にマリから文句をつけられたピエールは可愛そうだ。そこでの夫婦喧嘩におけるお互いの言い分を聞いていると、弁護士の私には、明らかにピエールの方に分があると思ってしまう。

もっとも、それはどこの夫婦でもある、ほんのちょっとした行き違いで、基本的にピエールとマリの夫婦仲はずっと円満だったらしい。ピエールの浮気も、マリの浮気もなかったのは当然。しかし、研究の中で喉の異変を訴え、咯血が続いていたピエールが、ある日、不良の交通事故で死んでしまうと・・・？

■□■不慮の死の後には？子供たちとの仲は？■□■

いくら気の強いマリ（キュリー夫人）でも、さすがにピエールの死はこたえたらしい。研究にも身が入らず、このまま廃人になってしまうのではないかと心配されたが、そこで“お助けマン”として登場したのが、同僚のポール・ランジュバン（アナイルン・バーナード）。折に触れて落ち込んでいるキュリー夫人を励ましていたポール・ランジュバンだったが、アレレ、そんな親切が次第に愛に変わっていくとは・・・。なるほど、マリの愛と情熱は大したものだ。そのうえ、空席となったソルボンヌ大学の教授の地位がキュリー夫人にも与えられる可能性が生まれてくると・・・？

他方、「カエルの子はカエル」とはよく言ったもの。二世議員には批判の声が強いが、藤圭子、宇多田ヒカル母子のような二世歌手や美濃部達吉、美濃部亮吉、父子のような二世学者についての批判は全くない。それと同じように、二世科学者にも何の問題もないが、本作後半に見るキュリー夫人と長女イレーヌ（アニャ・ティラー＝ジョイ）との共同研究の姿は素晴らしい。

その上、ストーリー終了後は、字幕でイレーヌも夫とともにノーベル賞を受賞したことが表示されるからさらにすごい。まさに、本作冒頭に見る研究室でマリ（キュリー夫人）

が死に至る風景を見ても、一生現場主義を貫いたキュリー夫人＝天才科学者の愛と情熱の人生は素晴らしい、の一言だ。

■□■放射能は危険！本作にはそんなメッセージが！■□■

レントゲン写真は私の小学生時代からあったから、レントゲン照射には放射能被ばくの危険があることは小さい時から知っていた。しかし、ラジウムという新しい元素の発見に至るピエールとマリの共同研究の過程で、ラジウムにそんな危険があることは分かるはずがない。ラジウムを発見した後、ピエールとマリはそれに特許を求めなかったらしいが、そのためラジウムは透視術等を含む、ありとあらゆる方面から商業利用されたい。ラジウムの活用法として最も意義があるのは、レントゲン写真とがん細胞の退治だが、本作では、それらがしっかり描かれるので、そのシーンからラジウムの意義をしっかり確認したい。とりわけ1914年から1918年の第一次世界大戦は国家の総力戦として戦われ、塹壕戦では多くの死傷者が発生したため、レントゲン撮影によって腕や足の切断の可否が判断できることが大いに役立ったらしい。しかし、他方で、ラジウムが、そしてまた、そこから生まれる核分裂が悪用されたら・・・？

2月24日の侵攻からすでに8ヶ月を経たウクライナ情勢では、ロシア軍の敗色が濃くなる中、戦術核の使用が現実的なリスクとして議論され始めている。2011年3月11日の福島第一原子力発電所事故もひどかったが、1986年のチェルノブイリの原子力発電所の事故はもっと悲惨だった。そして、1945年の広島、長崎への原爆投下後も、東西冷戦下のアメリカのネバダでは大規模な原子爆弾の実験も行われている。しかして、本作ではそれらのシーンが次々と登場するので、それにも注目。しかし、これは一体何？これはキュリー夫人のせい？いや、いや、そんな馬鹿なことを言う人は誰もいないはずだ。すると、なぜ本作にこれらのシーンが登場するの、その賛否は分かれるだろうが、私はこんなシーンの挿入に大賛成。

本作はパンフレットの販売がなく、上映も1回のみ。新聞紙評も少ないが、私にはグッド！核戦争のリスクが現実化している今、キュリー夫人の愛と情熱の中から何かをしっかりと学びたい。

2022（令和4）年10月25日記